

## ”poeta doctus” Gottfried の文体の特徴

— Hartmann との比較において —

須 澤 通

1

Gottfried von Straßburg が、ラテン語やフランス語に熟達しているばかりでなく、神学や古典古代の詩人に関する知識にも深く精通した中世盛期の最も学識ある詩人”poeta doctus”であることは研究者の一致した意見である<sup>1)</sup>。彼の言語は細部に至るまで彫琢されているが、しかし、だからといって修辞学的装飾を自己目的とするのでもなく、物語の構成が彼の装飾法によってけばけばしく飾り立てられるということもない<sup>2)</sup>。つまり彼はフランスの原典はもちろん、ドイツの同時代の詩人をもはるかに凌駕する当代切っの Rhetoriker であった<sup>3)</sup>。Gottfried に代表されるドイツ中世盛期の宮廷文学における言語形式を規定した Rhetorik は古典古代に基礎を置き、これを新たに洗練したもので、ドイツ語が中世宮廷文学によって卓越した文学語にまで発展することができたのは、これに負うところが大きいとされる<sup>4)</sup>。Gottfried は詩人と読者の関係、芸術と社会の関わりについても”Tristan”のプロローグで自身の考えを述べている。彼によると、詩人は物事を正しく評価、理解できる読者の共感を必要とする。それゆえ詩人による芸術は社会の人々の中にしっかりと根付き、これと（少なくともその一部と）結びついたものでなければならない<sup>5)</sup>。「芸術が称賛に値するものであるなら、そこでは尊敬と称賛は芸術を促進する。」<sup>6)</sup>

Gottfried は読者を意識するばかりでなく、同時代の詩人仲間の作品にも強い関心を抱く。”Tristan”の作中における「トリスタンの刀礼」の章で、彼はドイツの同時代の詩人仲間の作品に対する文学論評を展開する。N. R. Wolf によると、このような Gottfried の言語に対する姿勢および言語使用こそが、シュタウフェン朝宮廷詩人語 (die höfische Dichtersprache der Stauferzeit) が社会集団と結びついた Funktiolekt (機能語) であるという These を証明することになる<sup>7)</sup>。Gottfried の文学論評ではまず Hartmann von Aue が称賛の対象となる。

Hartman der Ouwaere, / âhi, wie der diu maere  
 beide ûzen unde innen / mit worten und mit sinnen  
 durchverwet und durchzieret! / wie er mit rede figieret  
 der âventiure meine! / wie lâter und wie reine  
 sîniu cristallinen wortelîn / beidiu sint und iemer mûezen sîn!

(T. 4621 ~ 4630)<sup>8)</sup>

(アウエの人ハルトマン、ああ、この人はどうして物語を、外も内もことばと精神でくまなく飾り、彩るのでしょう！ その話振りで、物語の思想を、なんと適切に言い表すのでしょう！ 彼の水晶のようなことばは、なんと濁りなく澄んでいて、

これからも変わらないでしょう！)

さらに Bigger von Steinach に対しても、彼のことば (wort) と精神 (sin) の二つが互いに結びついて、物語を殊の外見事に響かせていると賛辞を送る<sup>9)</sup>。読者に分かりやすい方法で、物語を、ことばの形容である「外的装飾」と、内容の形容である「内的色彩」によって飾ること、ここに Gottfried の理想とする文体 (Stilideal) の特徴を見ることができる<sup>10)</sup>。つまり彼の美的な修辞学 (colores rhetorici) は彼の物語の内容を明らかにし、それを間接的に説明するために使用され、これによって彼の言語は物語の思想的な深みと結びつくことができる。Gottfried は "Tristan" のプロローグで、自身の詩作の対象とする読者は「気高い心の持ち主たち」(die edelen herzen) であり、この人たちには「喜び」(liep) と「苦しみ」(leit) の相対性と両極性の理解と容認が期待できるとする<sup>11)</sup>。彼はここで Antithese と Oxymoron を用いて内容の深みを表現する。

diu samet in eime herzen treit / ir süeze sūr, ir liebez leit,  
ir herzeliep, ir senede nôt, / ir liebez leben, ir leiden tôt,  
ir lieben tôt, ir leidez leben. (T. 59 ~ 63)

(この人たちは、一つの胸の中に、甘美なる苦味と喜ばしい苦しみを、心からの喜びと憧れの苦悩を、喜ばしい生と痛ましい死を、喜ばしい死と痛ましい生を併せ持っている)

Gottfried の詩を支配し、特徴づける文体上のあや (Stilfigur) は、対照的な概念を対置した Antithese と、この対立概念をさらに一つの観念へと統合した Oxymoron である。これらの文体によって、「ことばと精神」、「表現と内容」は完全に一致し、彼の物語の中心テーマである「喜び」(liep) と「苦しみ」(leit)、「生」(leben) と「死」(tôt) の相補的な単一性が表現される。

本稿では、Gottfried の言語の特徴である Antithese と Oxymoron を、彼が、表現と内容の一致という点で自らの言語哲学の模範として賛美した Hartmann<sup>12)</sup>のそれと比較し、二人の文体の特徴と、Gottfried の Hartmann からの影響について調査し、二人の言語に Funktiolekt としての共通性がうかがえるのかを考察する。

## 2

2.1. Antithese は相反する、あるいは対照的な意味内容の語、語群、または文を同一構文を用いて対立させる文体上のあやである。これによって、中世の思考と世界観の特徴である二元的な対立の思考法が最もよく表現されることから、Hartmann や Gottfried のほかに、彼らの作品の原拠とされる Chrétien de troyes や Thomas でもこの文体の使用例が見られる。

Mes ore est mes sire Yvains sire, / Et li merz est toz obeliëz.  
Cil, qui l'ocist, est mariëz / An sa fame, et ansamble gisent,  
Et le janz aiment plus et prisent / Le vif, qu'onques le more ne firent.

(Yvain 2164 ~ 2169)

(しかし今やイヴァンは主君となり、死人は全く忘れられた。彼を打ち殺した人が彼の奥方と結婚して、二人は床入りの儀を行った。人々はこの生きている人を、死んだ人以上に愛した)<sup>13)</sup>

Por ço fist il ceste image / Que dire li volt son corage,  
Son bon penser et sa fole errur, / Sa paigne, sa joie d'amor,  
Car ne sot vers cui discoverir / Ne son voler, ne son desir.  
Tristan d'amor si se contient, / Sovent s'en vait, sovent revent,  
Sovent li mostre bel semblant, / E sovent lait, com diz devant.

(Tristan S. 71, 45 ~ 54)<sup>14)</sup>

(そもそも彼が彫像をつくったのは、正しい考えも愚かな錯覚も、苦しみも愛の喜びも、つまりは思いのたけをこれに訴えるため、なぜなら、欲望であれ渴望であれ、ほかに告白する相手を知らなかった。これが恋するトリスタンの振舞い、立ち去るかと思えば、また戻る、機嫌のよい顔を見せるかと思えば、前述の、おぞましい顔を見せる)<sup>15)</sup>

しかし、この文体を整った芸術形式として完成させたのは Hartmann である。Wilhelm Scherer が、「神と世界、心と体、柔順な平静心と果てしのない願望、人間の中のより高きものより低きもの、このような対立とその仲裁が、ハルトマンのすべての作品を通して延びており、彼の叙事詩の諸問題の選択をも決めている」<sup>16)</sup>と述べるように、まさに「対立とその仲裁」こそが Hartmann の思考法であり、Antithese に彼の文体の特徴を見ることができると述べている。

sus heter wünne unde nôt. (I. 1696)

(こうして彼くイーヴェイン) は楽しみと苦しみを味わうこととなった)

[イーヴェインは泉の国の王を倒すが、城内に閉じ込められ、死の恐れと、一目ぼれした王妃を目にできる喜びを味わう]

des tôten ist vergezzen: / der lebende hât besezzen  
beidiu sîn ère und sîn lant. (I. 2435 ~ 2437)

(死んだ者は忘れられ、生き残った者が死んだ者の名譽と領土を手に入れた)

[泉の国の王を倒したイーヴェインが、この国の王妃ラウディーネとその王国を手に入れる]

mîn lip ist arm, daz herze rîch. (I. 3576)

(わたしの体は賤しいが、心は高貴だ)

[ラウディーネに絶縁され発狂し、広野をさまようが、魔法の薬で癒されたイーヴェインが自分の浅ましい姿に気づく]

und vreit iuch mitten saeligen. / ich bin der Unsaelden kint:

mit ten die unsaelec sint / muoz ich leider sin unvrô:

(I. 4448 ~ 4451)

(そしてあなたは幸せな人々と喜びを共にしてください。私は不幸の申し子です。  
残念ですが私は不幸な人々と不幸なままです)  
[巨人の横暴に苦しめられている城主が、城の客となったイーヴェインに悩みの訳を尋ねられて答える]

次の Antithese は、前に置かれた Oxymoron を説明する。

dô wonte under in zwein / liebe bî leide.

sî vreuten sich beide / daz sî zesamne wâren komen:

daz ir ietweder hete genomen / des andern dehein arbeit,

daz was ir beider herzeleit.

(I. 7484 ~ 7490)

(そのとき彼ら二人には、喜びは悲しみと一つになった。彼ら二人は、出会ったことを喜んだが、それぞれ一方が相手を苦しめたこと、それが二人の心からの悲しみとなった。)  
[イーヴェインとガーヴェインの親友が、互いにそれと知らないまま激しく決闘し、最後に相手の正体を知る]

それぞれが複数の文の組み合わせからなる2組の複合文の意味内容が対照をなす次の Antithese は、Hartmann の世界観を示し、圧巻である。

diu zwei jungen senten sich / vil tougen in ir sinne

nâch redelicher minne, / unde vreuten sich ir jugent,

und redten von des sumers tugent / und wie sî beidiu wolden,

ob sî leben solden, / guoter vreude walten.

dô redten aber die alten, / sî waeren beidiu samet alt

und der winter wurde lihte kalt: / sô soldens sich behüeten

mit rûhen vuhshüeten / vor dem houbetvroste.

sus schuofen sî ir koste / ze gevüere und ze gemache:

sî ahten ir sache / nâch dem hûsrâte.

(I. 6524 ~ 6541)

(若い二人は心の中で、ひそかにふさわしい愛に憧れ、若さを楽しみ、夏の素晴らしさや、もしそう暮らすことができるなら、二人とも本当の喜びに満ちた生涯を送りたいと語り合った。一方、老いた二人は、二人とも年を取ったこと、冬は多分寒くなるだろう、だから狐の毛皮のふさふさした帽子で頭が凍えないよう用心しなくてはならないと語り合った。こうして彼らは経費が生活に必要なものと快適さに必要なものでどれほどかかるか話した。彼らはまた所帯のきりもりに必要な仕事を検討した)

[イーヴェインは旅の途中泊まった城で、城主夫妻と特に彼らの娘に、手厚い歓迎を受け

る。若い二人と、老いた城主夫妻はそれぞれ歓談する]

Gottfried の Antithese は、喜びと苦しみ、生と死、楽しみと悲しみ、善と悪を中心とした対立概念の対置からなる。しかし、ここにおける Antithese は、対立の思考法を表すのではなく、対立関係の背後にある一つの真実を推測させる。このことから彼の Antithese は、対立概念が相補的に単一概念を導く Oxymoron につながり、これを広義の Oxymoron とみることも可能である。

tröst unde zwîvel vuorten in / unendeclichen under in.

tröst seite im minne, zwîvel haz. (T. 883 ~ 885)

(希望と疑いが彼を、二つの間で、どちらとも決めかねない状態にした。希望は彼に愛と言ひ、疑いは憎しみと言った)

[恋に思い乱れたリヴァリーンは、思いを寄せる女性のことばの一つ一つに一喜一憂し、心が乱れる]

sîn herze sach si lachende an, / und nam sîn ouge der van.

(T. 11773 ~ 11774)

(彼の心はほほ笑んで彼女を見たが、彼は彼の目をそこから離れた)

[媚薬によって、伯父への信義のためにも愛してはいけないイゾルデに運命的な愛を抱いたトリスタンは、この信義と愛の間で苦悩する]

welle wir liebe trîben, / ezn mac sô niht beliben,

wirn müezen leide ouch trîben. (T. 12504 ~ 12506)

(私たちが喜びを追い求めようと思えば、私たちが苦しみも追い求めることになるのは避けられない)

[トリスタンとイゾルデは、媚薬と、その結果の喜びと苦しみを伴った愛について知る。これを受けた詩人のコメント]

Gottfried には対立する概念の一方が Oxymoron からなる Antithese の用例も多く見られる。

Ir leben, ir tôt sint unser brôt./ sus lebet ir leben, sus lebet ir tôt.

sus lebent si noch und sint doch tôt / und ist ir tôt der lebenden brôt.

Und swer nu ger, daz man im sage / ir leben, ir tôt, ir vröude, ir clage,

der biete herze und ôren her: (T. 237 ~ 243)

(彼らの生、彼らの死は私たちの命の糧である。こうして彼らの生は生き、彼らの死は生きる。こうして彼らは今なお生き、実際には死して、彼らの死は生きる者の命の糧となる。今、彼らの生、彼らの死、彼らの喜び、彼らの苦しみが語られるのを聞きたいと思う者は、心と耳を貸されるがよい)

[プロローグで詩人が、トリスタンとイゾルデの愛ゆえの喜びと苦しみ、生と死の物語は

高貴な人の心に生き続け、命の糧となると説く]

次の Antithese では、複数の対立概念がそれぞれ対立しあう形をとっているが、いずれも同等のアクセントで対立しあうのではなく、一方の概念が他方の対立概念を強調すべく、そこに吸収され、一体化する。

er gerte verrer minne / und leit durch die grôz ungemach,  
die er weder enhôrte noch ensach, / und enhabete sich der nâhen,  
die sîn ougen dicke sâhen. / er gerte z'allen stunden  
der liechten, der blunden / Îsôte von Îrlanden  
und vlôch die wîzgehanden, / die stolzen maget von Karke.  
er qual nâch jener starke / und zôch sich hie von dirre.  
sus was er beider irre. / er wolde unde enwolde  
Îsolde unde Îsolde.

(T. 19376 ~ 19390)

(彼は遠くのを愛を熱望し、聞くことも見ることもできない女性のために大きな苦しみを受け、そして自分の目がしばしば見る女性をあきらめた。彼は絶えずアイルランドの光り輝く、金髪のイゾルデを熱望し、カルケの白い手の誇り高い乙女を避けた。彼は前者に激しく苦しみ、ここにいる後者から遠ざかった。こうして彼は二人を手に入れることができなかったのだ。彼はイゾルデを望み、イゾルデを望むことをしなかった)

[トリスタンの遠く離れ、決して会うこともかなわないイゾルデへの思いは募る一方である。そういう中で、彼は同じ名前ゆえにもう一人のイゾルデにひかれるが、心は彼の苦しみと悩みの対象である遠くのイゾルデのみに向けられる]

2.2. Oxymoron は意味上相いれない対立する語や概念どうしを組み合わせ、相補的に一つの観念にまとめ、含蓄のある効果的な表現を生み出す手法である。この Oxymoron は Antithese から発展し、これをさらに高度化したもので、Antithese における対照的な概念の対立関係は、ここでは外見上のもので、内部では両者は相補的に結合し、概念の単一性を作り出す。

Oxymoron は Chrétien de Troyes では独立した文体として発展することはなく、またこれ自体あまり用いられることもなかった<sup>17)</sup>。Thomas は愛の喜びと苦しみ、生と死の対立概念を並べた Antithese を用いたが、この Antithese から対立概念を統合する文体 Oxymoron への発展があったのかどうか識別することは、僅かしか残されていない Thomas の作品の断片からは難しい<sup>18)</sup>。Thomas のつぎの生と死を結合した表現法も、トリスタンとイゾルデの愛の性格を描写するが、ここでは Gottfried における文体と異なり、イゾルデがトリスタンのもとに来れば彼の生が可能となり、反対に彼女が国元に留まればそれは彼の死につながることを表現している<sup>19)</sup>。したがってこの二つの対立概念の結合を、意味内容の単一性を求めた Synthese と理解することは難しい。

Tristan vus mande cum druz / Amisté, servise e saluz

Cum a dame, cum a s'amie / En qui main est sa mort e sa vie.

(Tristan S. 144, 1437 ~ 1440)

(その手の中に彼の生と死を握る恋人、憧れの奥方としてのあなたに、トリスタンはその恋人として、愛と、奉仕と、挨拶をお届けします)<sup>20)</sup>

ドイツ語における Oxymoron も 12 世紀後半にいたるまでは、わずかな用例が見られるにすぎない<sup>21)</sup>。詩的表現の手段としての Oxymoron は 12 世紀後半の発明であり、これが Heinrich von Veldeke や Hartmann von Aue による文体上のあやとしての洗練化につながっていく<sup>22)</sup>。"Nibelungen"<sup>23)</sup>の喜びと悲しみを結びつけた次の表現法も、対立概念の Synthese と解釈することはできない。

wie liebe mit leide ze jungest lōnen kan.

(Nib. 17, 3)

(喜びが最後には悲しみによって報われるということ)

als ie diu liebe leide z'aller jungeste gît.

(Nib. 2378, 4)

(喜びがいつの世も最後の最後には悲しみに変わるように)

Hartmann の Oxymoron では、「私たちは見える目を持ちながら盲目だ(wir sîn mit gesehenen ougen blint I. 1277)」のような古風なタイプのもを除くと、この文体によって表現される概念は、二つの対立概念の調和された状態を示し、それを超えた単一の概念にまで止揚されることはない。「対立と仲裁の詩人」Hartmann の「仲裁」の部分はこの文体に見ることができるが、彼の思想、物語の中心テーマがこの文体によって描かれるまでにはいたらない。

wan sweder ir den sige kôs, / der wart mit sige sigelôs.

(I. 7069 ~ 7070)

(なぜなら彼らのどちらが勝利しても、その者は勝利して敗者になった)

er hazzet daz er minnet, / und verliuset sô er gewinnet.

(I. 7073 ~ 7074)

(彼は自分が愛している者を憎んでいるのであって、戦いに勝利するとその人を失うことになる)

sus werte under in zwein / âne lōsen lange zit

dirre vriuntlicher strît,

(I. 7090 ~ 7092)

(こうして彼ら二人には見せかけではない友情のこもった争いが長いこと続いた)

[イーヴェインと彼の親友ガーヴェインが互いにそれと知らず決闘し、やがて相手を知った二人が互いに勝利を譲り合う]

Hartmann にはこのほか次のような Oxymoron が見られる。ここでは対立概念は対立点を残し

たまま密接に結びつき、統合 (Synthese) としての一つの観念にまで高められる。この表現法は Gottfried の Oxymoron の特徴の一つにつながるところがある。

si wehselten beide / der herzen under in zwein,  
 diu vrouwe und her Iwein: / im volget ir herze und sîn lip,  
 und beleip sîn herze und daz wîp. (I. 2990 ~ 2994)

(彼ら、夫人とイーヴェインは互いに二人の心を取り替えた。それで彼女の心と彼の体は王について行き、彼の心と夫人はそこに留まった)

Gottfried は、彼の物語の中心テーマ、彼の中心思想を示す表現法に Oxymoron を用いた。彼のこの文体は、洗練され、高度に彫琢された最高の言語芸術で、これによって、愛は「喜び」と「苦しみ」、「生」と「死」が一つに織り成された存在(Wesen)として表される。Gottfried は、彼の物語の原拠とされる Thomas の「喜び」と「苦しみ」、「生」と「死」の Antithese を利用し、これをさらに Oxymoron へと発展させた。このことは、同じ Thomas を原拠として作られた北欧語と中世英語の「トリスタン」が、Thomas が Antithese を用いて組み立てたテーマをほとんど、あるいは全く利用しなかったことと対蹠的である<sup>24)</sup>。

Gottfried の Oxymoron は大きく 2 種類に分類できる。一つは彼の Antithese を一歩進めた表現法で、対立概念が対立点を残したまま一つに結びつき、その背後にある一つの真実を表現する文体上のあやである。

daz ergest und daz beste, / daz Marke an disen zwein enpfie,  
 (T. 12538 ~ 12539)

(最悪にして最高のもの、これをマルケ王はこの二人から受け取った)  
 [マルケ王は後に彼の最大の喜びと最大の苦しみとなるイゾルデを妃として迎える。この両極の中にあって身動きできず、押し潰される彼の運命が暗示される]

hie mite was ime diu wârheit / beidiu geheizen und verseit.  
 mit disen zwein was er bêtrogen. / disiu zwei, wâr unde gelogen,  
 diu haete er beide in wâne / und was ouch beider âne.  
 ern wolte si niht schuldic hân / und enwolte s'ouch niht schulde erlân.

(T. 15257 ~ 15264)

(こうして彼には真実が明らかになるとともに隠された。この両方に彼はだまされた。この二つ、真実と偽りを彼は頭の中では捉えたのだが、また両方とも捉えていなかった。彼は彼ら二人を罪あるものとしたくなかったが、また同時に彼らに罪を免れさせたくもなかった)

[妃と甥による裏切りを感じ取りながらも、自分への慰めのため無実と思い込もうとするマルケ王。疑惑と猜疑、嫉妬と憎悪、不安と懊惱、自愛と身勝手、優柔不断な彼はもはや真実を理解する目と、物事を正しく判断する心を持ち合わせない。トリスタンとイゾルデの愛と対極にある愛]

nu bin ich hie und bin ouch dâ / und enbin doch weder dâ noch hie.

(T. 18534 ~ 18535)

(今私はここにいれば、あそこにもいる。それでいて、あそこにも、ここにもいない)

ich sihe mich dort ûf jenem sê / und bin hie an dem lande.

ich var dort mit Tristande / und sitze hie bî Marke.

(T. 18538 ~ 18541)

(私は自分自身をあその海上に見ながら、この陸の上にいる。私はあそこをトリスタンと一緒に行きながら、ここでマルケ王のそばにいる)

[二人の愛の発覚によってトリスタンはイゾルデのもとを去っていく。その船を見送るイゾルデには生も死もなく、その両方があった。目から輝きを失い、口からことばを失ったイゾルデは心の中で自分自身に語りかける。ここでは、このような Oxymoron が連続して用いられる]

Gottfried の最も特徴的な Oxymoron は、対立概念を融合、もしくは止揚することで一つの真実、単一の概念を表現するもので、ここでは、個々の対立概念は昇華し、元の概念はもはやそこには残存しない。

ir tôt muoz iemer mêre / uns lebenden leben und niuwe wesen;

(T. 228 ~ 229)

(彼ら<トリスタンとイゾルデ>の死はこれからもなお、私たち生ける者のために生き続け、新しさを失わないだろう)

diu junge künigîn Îsôt / daz sî ir leben unde ir tôt,

ir wunne unde ir ungemach / ze allerêrste gesach.

(T. 9371 ~ 9374)

(若き王女イゾルデ、彼女が彼女の生と死、彼女の歡喜と悲嘆を一番先に見つけた)

[竜との壮絶な戦いに勝利したトリスタンは、切り取った竜の舌が放つ毒気で気絶する。これを運命の人イゾルデが一番先に発見する。この Oxymoron では個別の概念はもはや分離できない。この点で、同じく生と死を結びつけ運命の人を形容した Thomas の文体とは大きく異なる]

Tristandes leben und sîn tôt, / sîn lebender tôt, diu blunde Îsôt,

der was wê und ande.

(T. 18467 ~ 18469)

(トリスタンの生と死、彼の生きながらの死である金髪イゾルデは悲しく、胸が痛んだ)

Gottfried の未完の "Tristan" を締めくくる文のあやは、遠く離れた恋に苦しみ、絶望するトリスタンのことばである。ここでは彼のかつての愛への思いと、それを失った今の苦悩と嘆きが

Oxymoron と Antithese で表現される。特に Antithese を延々と連続させた Antithesekette は圧巻である。Gottfried は先ず Oxymoron によって、一つの喜びと一つの苦しみを共有したかつての二人の生活を描き、次に Antithese で現在の二人の別々の生活を表現する。ここでの Antithese で Gottfried は、Oxymoron とは対蹠的に、対照的な概念をそれぞれ相対立する関係へと位置づけるが、これは先に見た、対立関係の背後にある一つの真実を推測させる彼の Antithese の使用法とは全く異なる。ここに、「ことばと精神」、「表現と内容」を一致させるため Antithese および Oxymoron の機能を精密に、かつ大胆に調整し、変化させた Gottfried の言語芸術の神髄を見ることが出来る。

ez enstât nu niht als wîlent ê, / dô wir ein wol, dô wir ein wê,  
eine liebe und eine leide / gemeine truogen beide.  
nu stât ez leider niht alsô. / nu bin ich trûric, ir sît vrô.  
sich senent mîne sinne / nâch iuwerre minne  
und iuwer sinne senent sich, / ich waene, maezlich umbe mich.  
die vrôude, die ich durch iuch verbir, / owî owî, die trîbet ir  
als ofte als iu gevellet. / ir sît dar zuo gesellet.  
Marke iuwer hêrre und ir, ir sît / heime unde gesellen alle zît.  
sô bin ich vremede und eine. (T. 19479 ~ 19495)

(今は以前のようにはいかない。私たちが同じ幸い、同じ災い、一つの喜びと一つの苦しみを共に抱いた以前とは。今は残念だがそうはいかない。今は私は悲しく、あなたは楽しいのだ。私の心はあなたの愛に憧れているが、あなたの心は、思うに、私に憧れてはいないようだ。私があなたのために避けている喜びを、ああ、あなたは好きだけに行っている。あなたにはその相手がいる。マルケ王とあなたは自分の国元において、いつも一緒にいる。なのに私は異国において、一人だけだ)

2.3. Gottfried には Litotes で肯定概念を持たせた語や文と、この概念に相応する肯定の語、文を組み合わせることによって、肯定概念を強調する対立法が見られる。この語法も、同一概念の組み合わせではあるが、形態から見ると否定語・文と肯定語・文という対立形式の対置による文体的なあやで、一種の Antithese あるいは、単一概念の強調という機能から Oxymoron と見ることが出来る<sup>29</sup>。この語法、もしくは、これに近い語法は Hartmann にも数例見られるが、Gottfried とは本質的なところで異なる。Gottfried の語法は、Oxymoron と同様に、多くの場合、物語の中心テーマとも絡み、詩人の思想表現の手段として用いられている。

waz nemet ir iuch an / daz ir sô ungerne lebet  
und sus nâch tem tôde strebet? (I. 4994 ~ 4996)

(そなたはなぜ、それほど生きたくないと思ひ、それほど死のうとなさるのか?)

[巨人に立ち向かうイーヴェインに巨人があざ笑って言う]

sî wâren der schilte / ein ander harte milte:

den schiltlen wâren sî gehaz. (I. 7131 ~ 7132)

(彼らは互いに盾をいたわることをしなかった。彼らは盾に対して憎しみを抱いた)

do bestuont dâ nieman mêre: / sî vorhten in sô sêre

dâ vlôch man unde wîp (I. 7733 ~ 7735)

(するとそこでは誰も立ち止まっていたはいなかった。彼らはそれ〈獅子〉をととても恐れた。そこで男も女もその場を逃げ出した)

die pflegent nicht, si widerpflegent. (T. 32)

(このような人たちは〈芸術を〉育むのではなく、阻害することになる)

[プロローグで詩人は、優れた作品を非難し、逆に劣悪な作品を評価するような読者は、芸術を台なしにしてしまうと説く]

hêrre, ir habt uns gemêret / und niht geminret unser leit.

(T. 5828 ~ 5829)

(殿、あなたは私たちの悩みを増やしましたが、減らすことはありませんでした)

[トリスタンはいったん帰国するが、領国を義父に与え、再びマルケ王のもとに帰る。その時家臣たちが激しく嘆き悲しむ]

sine komen danne drâte, / sô koment s'al ze spâte.

(T. 6987 ~ 6988)

(彼らが急いでやって来ないと、彼らは遅れてしまう)

[イゾルデの伯父モーロルトとの決闘で劣勢のトリスタンに詩人は神と正義の助力を訴える]

sus gienc Îsôt Îsolde, / diu tohter ir muoter bî,

vrô und aller sorgen vrî. (T. 10986 ~ 10988)

(こうしてイゾルデはイゾルデと、娘はその母と並んで、楽しげに、何の心配もなく歩いて行った)

[イゾルデは結婚がかかった内膳頭の竜退治の偽りをトリスタンの助けで確認し、心暗れ暗れと裁きの席に向かう]

er sweic unde jener sweic, / daz ir deweder nie wort gesprach,

(T. 13622 ~ 13623)

(彼も相手も黙って、どちらも一言も話さなかった)

[トリスタンとイゾルデの密会を知ったマルケ王の内膳頭は猜疑と悪意と憎悪を胸の中に抑え沈黙する。そっと帰って来たトリスタンも相手の態度から事の重大さを悟り沈黙する]

si redeten ime ze leide dar / vil übele und anders danne wol.

(T. 14302 ~ 14303)

(そこで彼にとって不快なことに、彼らはいろいろと悪口を、好意とはいえないことを話した)

[トリスタンとイゾルデの密会を探るため、トリスタンの婦人部屋への立ち入りが禁止される。このことを回りの者たちは悪し様にうわさする]

ouch muote sî daz cleine, / daz s'in der wüeste als eine  
und âne liute solten sîn. (T. 16848 ~ 16849)

(彼らが荒野に、全く孤独に、そして連れれの者たちも無しで住むことになったことは、彼らにとって苦痛ではなかった)

[マルケ王によって追放された二人は、二人だけで愛の洞窟に住み、はじめて誰にも邪魔されることなく愛を交わすことができる]

mîn leit ist doch gemeine, / ine trage ez niht al eine.  
(T. 18555 ~ 18556)

(私の苦しみは二人一緒のもので、私だけが一人で背負っているものではない)

[イゾルデはトリスタンとの別離で、この心痛と苦悩は自分だけのものではなく、もう一人の自分であるトリスタンも背負っていると自分自身に語る]

swenne er sîn ouge an sî verlie, / sô wart er von dem namen ie  
sô riuwec und sô vröudelôs, (T. 18973 ~ 18975)

(彼が彼女に目を向けると、その名前ゆえにいつもとても悲しく、やるせない気持ちになった)

[イゾルデと離れて暮らすトリスタンは、同じ名前のイゾルデによって、恋人への思いと切なさを、さらに増す]

2.4. 複数の Homonym (同音同形異義語) を組み合わせることで異化効果を狙い、読者の注意を喚起する語法、Wortspiel (ことばの遊び) も Gottfried の文体の特徴にあげることができる。Homonym の組み合わせによって語の概念の相違を際立たせる、つまり同一構文の中でのコントラスト効果を求めたという点で、この表現法も一種の Antithese とみることができる。Hartmann では、Homonym を用いた Wortspiel の用例は見られない。しかし、同一の単語 gelten の様々な変化形を用いた Wortspiel のほか、Homophon (同音異義語) による Wortspiel の用例も見られる。

daz muozen sî besorgen, / swer borget und niht gulte,  
daz er des lihte engulte. / borgetens âne gelten,  
des vorhten sî engelten; / wand ers ofte engiltet  
swer borc niene giltet. / sî hetens dâ engolten,  
dane wurde borc vergolten; / dâ von ir ietweder galt  
daz ers an lobe niht engalt. / sî muosen vaste gelten

vür des tôdes schelten / und vür die scheltaere  
boeser geltaere.

(I. 7150 ~ 7164)

(借りて返さないひとがいたら、もしかしたらその報いを受けるかもしれないと、彼らは心配しなければならなかった。彼らは返済せずに借りをしたら、その報いを受けることを恐れた。なぜなら、借りて返さない者はしばしばその報いを受けるからだ。もし借りに返済がなされなかったなら、彼らはその報いを受けたらう。それで彼らのうちのどちらも名誉を失わないよう返済した。彼らは死の脅威をまぬがれるため、そして悪質な債務者との非難をまぬがれるため、盛んに返済をした)

[イーヴェインとガーヴェインの決闘で、二人は互いに相手の盾に激しく剣を振り下ろす。打撃を貸し付け、その場で支払いを受けるように]

der boeste ist dir der beste / und der beste der boeste.

(I. 144 ~ 145)

(おまえには、最も心卑しき者が最も優れた者で、最も優れた者が最も心卑しき者なのだ)

Gottfried では、Homonym による Wortspiel が、物語の内容、詩人の心を表現する。

Ez zimet dem man ze lobene wol, / des er iedoeh bedürfen sol,  
und lâze ez ime gevallen wol, / die wîle ez ime gevallen sol.

(T. 13 ~ 16)

(人が必要と思うものを大いに称賛することは当然のことで、それが自分に与えられるのなら、それを十分楽しめばよい)

[プロローグで詩人は、芸術は正当な評価のできる読者を必要としているとし、自分が必要とするものを手に入れることができるのなら、それを称賛し、享受すればよいと述べる。ここでの gefallen は gefallen 〈気に入る〉と zufallen 〈手に入る〉]

sine kunden umbe ir eigen leben / in selben keinen rât gegeben.  
si rieten her, si rieten hin / und enkunden nie niht under in  
gerâten, daz in töhte / und daz rât heizen möhte.

(T. 8643 ~ 8648)

(彼らは自分たちの命を救うすべを見つけることができなかった。彼らはあれこれと協議したが、彼らに役立ち、上策ということのできるものを自分たちの間で準備することはとてもできなかった)

[マルケ王の妃としてイゾルデを迎えるべくトリスタンは敵国アイルランドへ向かうが、同行するはめになった王の顧問官たちは大きな不安に襲われる。ここでは順番に、rât は〈救済の対策〉、râten (>rieten) は〈協議する〉、râten (>gerâten) は〈準備する〉、rât は〈上策〉]

wan einunge an in beiden, / der stric ir beider sinne?

Minne diu strickaerinne / diu stricte zwei herze an in zwein  
mit dem stricke ir süeze in ein (T. 12174 ~ 12178)

(二人の体の結合と二人の心の結びつき以外に 一惱みから解き放つことができたであろうか? 呪縛者ミンネは二人の、二つの心を彼女の甘美という鎖で一つに結びつけた)

[激しい愛に陥ったトリスタンとイゾルデには、その苦悩から解放されるすべは、体と心の結合以外ない。呪縛者、愛の女神ミンネの甘美な鎖と不思議な力によって縛られた二人は生涯離れることができない。ここでは、stric は〈結合〉、strickaerinne は〈呪縛者-女性-〉、stricken は〈結びつける〉、stric は〈鎖〉]

2.5. Gottfried には、このほかに、彼の Antithese、Oxymoron と同様、物語の奥深くに立ち入り、その思想の深みを表現する二つの antithetisch な語法が見られる。すなわち、統語上、または意味上対応し合う文成分を互いに交差させる Chiasmus (交差法) と、異なる構文で同義の文を並列し、反復させる Satzparallelismus (文対句法) で、いずれもコントラストによる効果を狙った、Gottfried の言語形式の中で重要な役割を果たす文体であるが、Hartmann ではその用例を見ることはできない。

Chiasmus:

die teilen wol gelîche / ir herzen künicrîche:  
daz ir wart Riwalîne, / dâ wider wart ir daz sîne;  
(T. 815 ~ 818)

(彼らは心の王国を等しく分け合った。彼女の王国はリヴァリーンのものとなり、それに対して彼の王国は彼女のものとなった)

sus was er sî und sî was er. / er was ir und sî was sîn.  
dâ Blanscheflûr, dâ Riwalîn, / dâ Riwalîn, dâ Blanscheflûr,  
dâ beide, dâ léal amûr. (T. 1358 ~ 1362)

(こうして彼は彼女であり、彼女は彼であった。彼は彼女のものであり、彼女は彼のものであった。ブランシェフルールのいるところにはリヴァリーンがいて、リヴァリーンがいるところにはブランシェフルールがいた。二人がいるところには誠実な愛があった)

si haeten beide ein herze. / ir swaere was sîn smerze,  
sîn smerze was ir swaere. (T. 11727 ~ 11729)

(二人〈トリスタンとイゾルデ〉は一つの心を持った。彼女の心痛は彼の苦痛、彼の苦痛は彼女の心痛であった)

ietwederez sach unde sprach / daz ander beltlicher an:  
der man die maget, diu maget den man. (T. 12034 ~ 12036)

(それぞれ相手を以前より大胆に見つめ、話しかけた、男は乙女を、乙女は男を)

der man bleichete durch daz wîp, / daz wîp bleichete durch den man;  
 durch Îsôte Tristan, / durch Tristanden Îsôt. (T. 14320 ~ 14323)  
 (一悲しみと悩みゆえー 男は女のために背ざめ、女は男のために背ざめた。トリスタンはイゾルデのために、イゾルデはトリスタンのために)

Satzparallelismus:

Canêlengres der kêrte hin / in maneger slahte trahte:  
 er trahte maneger slahte, / waz Blanscheffiure swaere  
 und dirre maere waere. (T. 792 ~ 794)  
 (カネーレングレスの人<リヴァリー>は様々の思考に陥った。彼はいろいろと考え込んだ。ブランシェフルールの苦しみは何だろう、この彼女のことは何だろうと)

Diz ist geschehen, ez muoz nu sîn. / er ist tôt der guote Rîwalîn.  
 (T. 1703 ~ 1704)  
 (これは起こってしまい、今やしょうがない。優れた人リヴァリーは亡き人となった)

die enkunden ime dâ niht gevromen/noch ze helfe im nie sô schiere komen,  
 (T. 5461 ~ 5462)  
 (彼らは彼を助けることも、すぐ助けに行くこともできなかった)

"lameir" sprach sî "daz ist mîn nôt, / lameir daz swaeret mir dem muot,  
 lameir ist, daz mir leide tuot." (T. 11986 ~ 11988)  
 (彼女<イゾルデ>は言った「ラムイール、それが私の苦悩です。ラムイール、それが私の心を痛めます。私を苦しめるのはラムイールです」)

3

以上、形式、あるいは内容のコントラストを鮮明にする手法としての、狭義および広義の Antithese と、これをさらに発展させ、高度化した表現法、すなわち対照的な形式および概念を相補的に統合する Oxymoron について、Hartmann と Gottfried の比較の中で見てきた。Gottfried は、これらの言語形式をいずれも物語の内容と深く結びつけ、その思想的な深みを表現する手法として利用している。ここでは常に、「外的表現」(äußerer Ausdruck)は「内的意味」(innere Aussage)の不可欠の要素となり、「形態」(Gestalt)と「内容」(Gehalt)は、誇張した表現や、過度の装飾なしに、理想的、共生的に一つに結びつく<sup>20)</sup>。

一方、Hartmann について Gottfried は"Tristan"で、この詩人の「ことばと精神」、  
 「形式と内

容」の調和と一致を絶賛するが<sup>27)</sup>、上で見た文体において、「外」(ußen)と「内」(innen)に対応するそれぞれ、「ことば」(worten)と「精神」(sinnen)、「飾る」(verwen)と「彩る」(zieren)、「話振り」(rede)と「思想」(meine)、すなわち"das Wie"と"das Was"の不可分の一致<sup>28)</sup>は、Gottfriedの「ことば」どおりには見ることができない。また、Gottfriedの思想と彼の物語の中心テーマを表現する上記の文体は、Hartmannでは、その性格を異にするか、あるいは全く見られない。この二人の詩人の文体の中で最も中心的で、最も特徴的な表現法であるAntitheseとOxymoronについては、二人の言語芸術の完成度に決して小さくない差異を認めざるをえない。

従来Hartmann研究では、あまりにも有名になった、GottfriedによるHartmann賛美の「ことば」を最大の根拠に、彼の言語と精神の「調和のとれた一致」<sup>29)</sup>が指摘され、彼の言語は「彼の思考そのままの再現」<sup>30)</sup>であると強調された。このほかにも、Hartmannの、特に"Uwein"とGottfriedにおける文構造と文体形式の類似点も指摘されている<sup>31)</sup>。さらに、今なお大きな関心の対象であるGottfriedの文体の「手本」をめぐる問題では、F. Vogtは、彼の芸術的な言語は詩人Gottfriedの個人的な才能によるものとしながら、antithetischな言語形式の手本としてHartmannの名前をあげている<sup>32)</sup>。しかしGottfriedの文体の特徴と、Hartmannとの関係については、これまでの両者の比較と分析によって、次のようにまとめることができよう。

Gottfriedは彼の物語の原拠とされるThomasの「喜び」と「苦しみ」、「生」と「死」を中心としたAntitheseを、自身の物語の中心テーマを表現する文体の手本とした。すなわち、このAntitheseを洗練し、発展させ、さらに独自の表現法であるOxymoronを完成させた。彼はフランスの言語芸術に倣い、古典古代(Antike)のRhetorikを範として、独創的な言語形式を「学術的」に創作した。彼には、Peter Abaelardの思弁的思考法や学説、さらにはHeloiseとの関係など、フランスの影響ととれる箇所が随所にかがえる。また彼は、Ovidを詳細に知っていたし、その他のAntikeの詩人についての知識も持ち合わせていた<sup>33)</sup>。Gottfriedは、彼の思想的中心テーマdas unerklärbare WesenとしてのMinneを表現するため、彼の学識(doctrina)を駆使し、古典古代の世界とキリスト教の世界を統合し、フランスの思想をドイツの思想に移植し、彼独特の言語芸術を完成させた。このことは彼の極めて独創的な新造語(Neologismus)にも見られるが<sup>34)</sup>、何よりAntitheseとOxymoronの表現法にはっきりと見ることができる。それでもなお、あのGottfriedのHartmann賛美の「ことば」はあまりにも力強い。ドイツ中世の宮廷文学の先駆者Hartmannの明晰達意の言語は当然のことながらGottfriedの尊敬の対象であったし、作詩上の影響も受けた。だからこそ彼の文学論評において一番最初にその名前を挙げた。しかし、ここにおけるHartmannやBliggerの修辞学的文構造の称賛は、彼らの名のもと、他ならぬ"poeta doctus"としてのGottfried自身の言語に対する、間接的な、しかし同時に端的な賛美であると言うことができる。

## 註

- 1) Gottfried Weber/ Werner Hoffmann: Gottfried von Straßburg, 5. Aufl. Stuttgart 1981, S. 5.
- 2) Peter Ganz: Gottfried von Straßburg, Tristan, 1. Teil, Wiesbaden 1978, S. XXIV.
- 3) Ebd.

- 4) Norbert Richard Wolf: Geschichte der deutschen Sprache. Bd. 1. Althochdeutsch – Mittelhochdeutsch. Heidelberg 1981, S. 181f.; Wilhelm Schmidt: Geschichte der deutschen Sprache, 6. Aufl. erarb. unter der Leitung von Helmut Langner. Stuttgart/Leipzig 1993, S. 89.
- 5) Peter Ganz: a.a.O., S. XXVI.
- 6) Gottfried von Straßburg: Tristan 21 ~ 22.
- 7) Norbert Richard Wolf: a.a.O., S. 179f.
- 8) Rüdiger Krohn: Gottfried von Straßburg, Tristan nach dem Text von Friedrich Ranke neu hrsg. Stuttgart 1981.
- 9) Gottfried von Straßburg: Tristan 4705 ~ 4709
- 10) Peter Ganz: a.a.O., S. XXIV.
- 11) Ebd., S. XXVII.
- 12) Hartmann von Aue: Iwein. Hrsg. von G. F. Benecke u. K. Lachmann. 7. Aufl. neu bearb. von L. Wolff. Berlin 1968.
- 13) Chrétien de Troyes: Yvain, übersetzt und eingeleitet von Ilse Nolting-Hauff, München 1962.; 赤井慧爾: 『ハルトマン研究』朝日出版社 1981年 177頁
- 14) Wiebke Freytag: Das Oxymoron bei Wolfram, Gottfried und anderen Dichtern des Mittelalters, München 1972, S. 244.
- 15) 新倉/神沢/天沢 訳 『フランス中世文学集 1』白水社 1991年 296頁
- 16) Wilhelm Scherer: Geschichte der deutschen Literatur, S. 181.; 赤井慧爾: 177頁
- 17) Wiebke Freytag: a.a.O., S. 120f.
- 18) Ebd., S. 244.
- 19) Ebd.
- 20) 新倉/神沢/天沢 訳 『フランス中世文学集 1』 340頁
- 21) Wiebke Freytag: a.a.O., S. 129.
- 22) Ebd., S. 141f.
- 23) Helmut de Boor (Hrsg.): Das Nibelungenlied nach der Ausgabe von Karl Bartsch, 22. Aufl. Mannheim 1988.
- 24) Wiebke Freytag: a.a.O., S. 248.
- 25) Yoshihiro Koga: Die Litotes im Tristan Gottfrieds von Straßburg, Doitu Bungaku 1971, S. 119 ~ 131.
- 26) Gottfried Weber/ Werner Hoffmann: a.a.O., S. 26.
- 27) Gottfried von Straßburg: Tristan 4621 ~ 4637.
- 28) Peter Wapnewski: Hartmann von Aue, 4. Aufl. Stuttgart 1969, S. 2.
- 29) Gustav Ehrismann: Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters, Teil II. München 1927, S. 206.; 赤井慧爾: 2頁
- 30) Gustav Ehrismann: a.a.O., 206.; 赤井慧爾: 3頁
- 31) 須澤 通: 『ハルトマン、ヴォルフラム、ゴットフリートの文体について』ドイツ文学 1983年 76頁 ~ 88頁
- 32) Wiebke Freytag: a.a.O., S. 17.
- 33) Peter Ganz: a.a.O., S. XXX III ff.
- 34) g'êvet (< êven < Ève) 「エヴァ (Eva) の性質を持った」; g'isôtet (< geisôten < Îsôt) 「イゾルデという魔法にかかった」; betternaere (< bette) 「寝物語」; erbeminne (< erbe) 「昔からの引き継いできた本来の愛」; entherzen (< herze) 「心を奪う」; gewerldet (< werlden < werlde) 「社会の一員としての心構えを持った」; gebeidet (< beide) 「二つに重なった」; viuwerniuwen (< niuwen) 「新たに燃え上がる」 etc.